

地域の教員として取り組む防災教育

太子町立太田小学校
教諭 前田 健佑

1 取組の内容・方法

(1) EARTH員としての派遣活動

平成26年8月、熊本地震の被災地である益城町の小学校に派遣された。2学期のスタートに合わせて、登校してくる児童の心のケアを目的とした派遣であった。現地では、登校指導から授業のサポート、教材づくりの支援など、派遣先の先生方が子どもに向き合えるようサポートをしていった。また、心のケアに関する相談や、気になる児童について一緒に観察をしたうえで意見交換を行うなど、現地の先生方が求めていることを第一にということ



写真1 (上) ゲームを取り入れた心のケア

ことを念頭に置いて活動した。派遣先では、これが正解という答えのない問題が多い。ただ、これまで研修してきたことや先輩のEARTH員の方々から教えていただいたことをもとにして、できるだけ多くの選択肢を提示できるよう心掛けた。その中から、よりbestはないかもしれないが、betterの選択肢を選んでもらえたらということ

(2) 自校での防災教育

本校は児童数1000人を超える大規模校である。大規模校ゆえ、大災害が発生したときの対応も、様々なパターンを想定する必要がある。

本校では、主に保護者への引き渡し訓練に力を入れている。1000人を超える児童を、いかにして確実に、迅速に引き渡すことができるか。よく行事と抱き合わせた引き渡し訓練をしている学校を見かけるが、本校は、より実際に即した訓練をするために、引き渡し訓練のみの日を設定し、保護者の協力を得て行っている。保護者の方々も、そのために仕事を休んでいただく必要もあり、大変感謝しながら実施しているところである。ほとんどの児童は保護者の方が迎えに来てくださるが、どうしても仕事の都合等で迎えに来られない家庭も少なくない。その場合は、親戚に協力を依頼していただいたり、近所の知り合いの家庭に依頼していただいたり、大災害の際にも同様の連携を取れるように声かけをしている。

その成果もあり、とてもスムーズに進行することができている。毎回反省をもとに微調整を加えながら、この引き渡し方法も回を重ねるごとに保護者にも職員にも浸透し、安定感が増してきた。

(3) 町内の中学校における防災講話

町内の中学校においても、避難訓練に合わせて防災講話をおこなっている。生徒たちの避難訓練の様子を観察し、それについての講評を述べ、それに加えて私の被災地派遣の経験をもとに、中学生に求められることを話した。地域の中学生であるという意識が高い生徒たちであったため、小中の連携も踏まえ、彼らが共助を担う大きな力であること。その力を、地域のため、自分たちより小さい命を救うためにできる範囲で手伝ってくれたらうれしいという話をしたところ、とても真剣に聞いている様子が印象的だった。



写真2 (上)

太子東中学校全校生徒に向けて実施した防災講話

ありためて日々の訓練の大切さなどがわかりました。

自分の命は自分で守らないといけないし、油断していると

お<危険なんだ>なと思いました。中学生が町の皆を

つれて避難したという話を聞いてす<かっこいいなと

思いました。私もいつ地震や災害が起きても周りの人を

助けられるような知識や力をつけたいなと思いました。

写真3 (左)

生徒の感想

(4) 町行政と連携した取り組み

太子町では、毎年夏に学校園の管理職・防災担当、指定避難所の管理者を対象とした防災研修会を開いている。その講師として活動させていただいている。町の防災部局担当者との連携を取りながら、町の防災体制の説明とともに、HUG（避難所運営ゲーム）やクロスロードなどのゲームを通した研修も取り入れながら、起こりうる諸問題について考える機会を設けている。

さらに、町内の6小中学校が各々で作成していた災害対応マニュアルと避難所運営マニュアルを、町防災部局担当者と町内のEARTH員と協力して、統一できるマニュアルを作成した。各校で実態が違ふところもあるので、町内統一部分+各校独自の部分で構成するものにするよう心掛けた。

2 取組の成果

自校または太子町における全ての活動に大きく影響を及ぼしたのは被災地派遣である。被災地での活動の経験を地元に戻すことができていることは私の願うところであり、今後もそれを忘れずに活動していきたいと考える。

3 課題及び今後の取組の方向

まだまだ防災教育が根付いているとは言い難い。小中学校においては、学習指導要領改訂による過渡期ということもあり、なかなか防災教育の研修をじっくりと取る余裕がないという実情もある。しかし、1年に何回かの研修や訓練をどのようにおこなうかによって、災害が起きた時に助かる命の数が変わると考えれば、おろそかにできる教育ではないことは明白であると考え。これからも、防災教育の大切さを地元にしかりと根付かせていくことができるよう、活動を続けていきたい。